

【特集】待たなし、日本の森】国土の約7割が森に覆われた森林国、日本。先人の努力によって育まれてきた森は、おいしい空気や水を生み、生態系を保全し、木材や農水産物の豊かな恵みをもたらしてきた。しかし、経済効率優先の加速が導いた過疎化や、外国木材の輸入増加等にもない、林業は窮地に立たされている。本特集では、現状の課題を知ること、日本の森の未来を見据え、我々にできること、いのちを育む自然の循環と経済の関係についても考える。

◆巻頭インタビュー

あらゆるいのちへの優しさが 美しい山をつくる

速水林業代表 速水亨氏



PROFILE 速水亨（はやみ・とおる）

速水林業代表。株式会社森林再生システム代表取締役。1953年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、東京大学農学部林学科研究生を経て、林業に従事。三重県紀北町海山で江戸時代から続く老舗林業家の9代目。1980年代後半から高性能林業機械による作業効率化に取り組み、2000年2月、所有林1070haについて世界的な森林認証システムであるFSC認証を日本で初めて取得するなど先進的な経営で知られる。2001年朝日新聞「明日への環境賞」森林特別賞受賞。主な著書に『日本林業を立て直す—速水林業の挑戦』（日本経済新聞出版社）。<http://www.re-forest.com/hayami/>（速水林業）

林業は60年、100年先を見据える生業。植林から伐採まで最低でも数十年の時間がかかる。今日の山の手入れは、孫やその先の世代に生きる山のためであり、自分の目で成果を見ることはない。翻って、山の下界には、四半期という短いスパンで成果を追求する企業、自身の権利と目先の利益に拘泥する市民の姿がある。見えない一歩先の世界や未来を思う想像力に欠けてはいないだろうか。今こそ、林業に学ぶとき。そんな思いを抱き、日本における森林環境管理の第一人者、速水林業代表の速水亨氏を、三重県紀北町の速水林業大田賀山林に訪ねた。



速水 この山は3年前に亡くなった親父が始めた環境配慮型林業の集大成です。その木は200年、そこから100年、この前方で10数年。間伐したばかりで、とてもすがすがしいでしょう。

— 本当に気持のいい山です。速水林業は江戸時代から続く林業家で、戦後、お父様の速水勉さんが、はじめは森林の土壌の維持を目的に、結果的には環境を意識した経営に取り組み始められました。総面積は1070ヘクタール（ha）。東京ドーム227個分といわれてもイメージできない広さですが。

速水 旧海山町にある2つの熊野古道はともに私の山を通っています。

— そうなんですか！どこからがご自分の山かわかるものですか？

速水 山に入れば手入れの具合でわかりますよ。今、トヨタ自動車の山を管理していますが、お預かりする際に「5年間で他の山と明確に違いがわかるようにします」と申し上げました。そして5年後、素人が見てもわかるくらい見事に変わりましたよ。山には所有者の意志が現れます。

— 速水さんのおっしゃる良い山とはどんな山でしょうか？

速水 明るくて、木の間隔が均一で全体的にまっすぐ伸びている。下草や広葉樹があることも大切ですね。

これらは普通、間伐の邪魔になるため除去するのですが、私たちは何もしません。慣れると問題ないんですよ。下草がある山は土壌が流れないので腐植土ができます。そのヒノキの根本には厚さ30センチくらいのふかふかな腐植土が広がって、生物の宝庫です。我々の足の下には今5000匹くらいの小さな生物がいます。バクテリアまで入れたら何億にもなるでしょう。土壌が生き物のいのちを育てている。土壌が流れないことは、生物多様性を維持するための第一歩です。

— それにしても、なんともいえない甘い香りがします。

速水 腐植土の香りです。下草が腐っていく過程でできるアルコールの香りかな。

— 速水さんの山は約8割が人工林で、99%が針葉樹のヒノキで占められているのですよね。人工林、針葉樹というとネガティブなイメージもありますが。

速水 自然林や広葉樹の方が環境にいいと思われがちですが、実は広葉樹は針葉樹に比べると下草が育ちにくいのです。よくドングリのなる木



下草も美しく茂る

を植える活動がありますが、斜面にたくさん植えると土が流れてしまいます。また、針葉樹のスギが増えると山が崩れるとの説がありますが、それは間違いです。スギはもともと水の多いところに植えるのだから崩れやすいのは当然。このヒノキの山が広葉樹の山より絶対的に豊かだとはいいませんが、人工林、針葉樹でも正しい知識と技術で素晴らしい山はできます。問題は知識に基づいた手入れなんです。そこを理解していない学者もいますね。

— 具体的に山の手入れはどのようなことをするのですか？

速水 基本は光の管理です。結局切るか切らないかだけ（笑）。難しいことではない。ただ、管理には何十年か先の森の姿を想像する力が必要です。目の前の森林を良くする方法もありますが、それは本質ではありません。80年、100年先のイメージを持つことが大事で、科学的な知識も必要なのですが、なかなか浸透しないですね。



間伐が行き届いた森

いますよね。

速水 速水林業の木の特徴は、年輪幅が一定で上質なことです。これはなかなか難しい技なんですよ。

一年々、木は高く太くなっているわけですから、前年と同じだけの成長だったら年輪の幅は狭くなってしまふと、等間隔の年輪に保つて難しいわけですね。品質管理の素晴らしさには感服です。さて先ほどトヨタ自動車と森林の話がありましたけど、企業と森林のかかわりについてどうお考えですか。

速水 企業と森林のかかわり方にはいくつかありますが、社員が植林をしたり、そういう活動に資金提供するのが入門編。次のステージとして企業には山を買ってもらいたいのです。山の値段は今とても安くなっています、1000haを一気に買う個人もいるくらいですから、価格からすれば決して難しくありません。そ

して山を持つたら、世の中に自社が持つ意味を積極的に広報してもらいたいですね。すでに森林を持つている場合でも、「きちんと管理する」という意識に欠けるケースもあります。「管理は森林組合に頼んでいる」だけで責任を果たしているといえるかは疑問です。本質を理解していないのではないのでしょうか。海外では有名ブランドが森林再生で評価を上げていますが、日本では世論を含め、まだそのような気運が高まっていないことも事実でしょう。

— 企業には心して山を持ってもらいたい、いい森林モデルを発信してもらいたいですね。

「地域のために」— 旦那衆の役割を企業も担う時代

— 速水さんは慶應義塾大学卒業後、いったんこちらに戻り、再度上京して東京大学で林学を研究されたとか。最初から家業を継ごうと思っ

いたのですか？

速水 覚悟などはなかったですよ。儲かっていたから、くらいで(笑)。僕が若い頃は1ha千五百〜六千万円で売れたのですから。丸太に切り出すこともなく「はい、ひと山いくら」と、1000haのうち5、6haの木を売るだけで1億円2億円になったんです。それが今では一生懸命手をかけて1ha売っても300万円残ればいいかな、というところです。どっちも漫画みたいな話でしょ(笑)

— ずいぶん状況が変わりましたね。

速水 そうですね。今では私どもの経営規模の500ha以上の森林を持つ者の、林業からの平均年収は250万円程度です。それ以下の面積ですと20万円台です。年収ですよ。しかし世界的に見れば林業は間違いなく利益を出していますから、今が日本の林業の頑張りの時でしょう。もう一代は辛抱かもしれません(笑)

— しかし、そこが林業を生業として成り立たせるポイントですよ。経験と科学的な考察が必要です。速水さんも常に研究を続けていらっしや



—そうですか。超長期的な経営視点と胆力が求められます。

速水 そういう意味では、株主のいる法人経営とは合わないかもしれないですね。多くの大企業では林業を収益事業から切り離しているところもあります。

—速水林業も法人ではない理由はそういうことなのですね。ただ、地元の名士でいらっしやるわけで、地域での役割も大きく期待されて

こられたのでしょうか？

速水 かつて田舎では林業家や網元が「旦那衆」として世話役を務めました。林業も漁業も地元民からはお金を儲けません。材木も魚も地元では大して売れないから外で稼ぐのです。旦那衆は自分の損得に関係なく動ける人で、地域で尊敬される存在でした。もめ事を解決し、学校の備品が足りなければ面倒をみる。地域の旦那衆がうまく育っているところは町が安定していました。—速水さんは、まさに旦那ですね。

しかし、少なくなっていますね、旦那衆。

速水 既に私はもう違いますよ。今は企業が日本の旦那衆として役割を果たすべきなのかもしれません。

—でも、旦那になるためには覚悟が必要ですね。

速水 そうですね。営業も総務も、何かアクションを起こすときの判断に、環境や地域への貢献が頭をかすめる、という企業風土ができることが大切でしょう。旦那衆の判断には常に「地域のために」が頭にある。たまにできの悪い三代目の放蕩息子もいますけど（笑）。そういう昔ながらの田舎的な価値観に習って、現代日本の企業風土を見直してみるのもいいかもしれませんね。

違法伐採された木材を 輸入し続ける日本

—企業活動のあらゆる判断において、常に社会への責任を忘れないというお考えは、まさに森林FSC認

証※（以下FSC）に繋がるように感じます。速水林業は2000年に日本で初めてFSCを取得されました。

速水 1998年、フィンランドで開催されたISO14000の国際会議でFSCと出会い、その後、FSCの日本窓口だったWWF（世界自然保護基金）ジャパンと連絡を取って勉強しました。ISOは「システム認証」なのに対し、FSCは「パフォーマンス認証」だとわかりました。FSCはシステムの結果としての森林自体を認証するパフォーマンス認証で、僕はそちらに乗った。審査基準もわからない手探りの状態で、自力でレポートをまとめ提出しました。

—すごいですね。ちなみに、ロンドン五輪のオリンピックパークは、100%FSCをはじめとする認証材でつくられたとか。2020年東京五輪でも使われるのでしょうか？
速水 ソチ五輪でも認証材が使われましたし、林野庁も「認証材を使わない」とは言っているのです

が、東京都や組織委員会などの関心度は低いです。認証材を使わなければ先進国として恥ずかしい。

—日本でもFSCが少しずつ広がっているように感じます。

速水 紙の分野では広がりがつつあります。ネピア製品、スターバックス

の紙袋、日本テトラパックの飲料容器、三越伊勢丹のパンフレット、ゼボン・イレブンのコピー用紙もFSC認証材です。消費者に使ってもらいたいのはもちろんですが、特に備品を買う企業の総務の方をお願いしたい。企業各社のそろばんに「社会貢献という玉」を追加してもらえたら、世の中変わると思います。

—木材の分野ではもつと国産が使われるべきでしょうか？

速水 場所や用途に合わせて使い分ければいいと思います。ヨーロッパの木材「ホワイトウッド」は内装には向いていますが、腐りやすいので柱には合わない。以前、日本の大手企業が輸入して柱に使ったのですが、結局国産に戻しました。しかし、それよりも大きな問題は、輸入される木材には違法伐採されたものがまだ含まれていることです。先進国でそれを規制する法律がないのは日本だけです。

—しかも安価で入ってくるので日本の林業も脅かされます。

速水 防止策として、日本林業を最大限効率化してかかる手入れ費用より安い価格で入ってくる木材には、その差額分に輸出課徴金をかけてもらうという方法があります。輸出課徴金は輸出する国に落ちる仕組みですから、再生産を考えない木材を輸出することが多い途上国に、そのお金で適切な森林管理をしてもらう。この方法は理論的には可能です。

—途上国の林業の発展にも貢献できますね。

速水 しかし、まずは最低でも、合法性を証明できない木材の国内流通を止める、先進国では当たり前の法律が必要です。違法伐採は貧しい国の女性や子どもを苦しめます。森がなくなると水や燃料が不足して、女性や子どもたちはそれらを運ぶのに

長時間の重労働を強いられます。特に女の子は教育が受けられず、幼児売春にも繋がる。日本人の買っている一部の木や家具や紙はそのような犠牲の上にあるわけです。

—世界的な規制はないのでしょうか？

速水 森林管理はその社会性の強さゆえ、努力目標はできても罰則を伴う規制はつくられていないのです。だから各国それぞれの自主規制が求められるわけです。日本でも議員はある程度動いているのですが、業界が動かない。

—その理由は？

速水 面倒だからです。「そもそも違法って何なんだ？」と。森林は社会性が強いし、それ以上に人目につかないところで伐採するので、明確に違法性を指摘するのが難しいのです。逆に合法性を証明させるのが一番です。手間もかかるので自主規制



では限界があります。

「みんな」が喜ぶ森づくりをしたい

—速水さんは一般社団法人日本林業経営者協会の会長を9年務め、民主党政権時代の事業仕分けにも「仕分け人」として参加されたと伺っています。まさに日本林業のリーダーです。

速水 60歳になって、日本林業経営者協会の会長も、国の審議委員も退きました。これまで10数年、業界のために動いてきましたが、このあたりで地元を軸足を戻そうと思っています。速水林業も私も世の中に知られましたが、経営自体は苦しいですから。従業員の給料ももっと上げていすね。

—長年業界を牽引してこられた速水さん。持続可能な森林と、林業という生業とを両立させる極意は何でしょうか？

速水 そんなものはないですよ

(笑)。流れに逆らわない。運命を受け止める。

—とはいえ、一筋縄ではいかない林業を、速水さん流の知恵と努力で牽引してこられたんですね。

速水 以前、尊敬するある老人から言われたことがあります。「速水よ、みんなはな、お前を見てると憎たらしくなるんだよ。お前にはへあいつが儲かっているのに何で俺が儲からないのか」と思わせる力がある。お前は生涯それを続けないといかん。儲かっているのか言っていないかんのだ」と。それで僕は泣きごとを言うのを止めました。僕のそんな態度にみんな勝手に「速水はすごい」と誤解する。そんな感じですよ。

—やせ我慢の美学、粹でかっこいいですよ。旦那道ですね。

速水 そうでもないですが(笑)。僕はきれいなものが好きです。さつき歩いた山、きれいだっただけでしょう？森はきれいであるべきです。森

の美しさは歩いてもらえればわかります。説明はいりません。でも、この美しさは見た目だけではありません。そこには、あらゆるいのちに対する優しさがある。そういう視点で私は林業をやりたいと思っています。儲かるだけの林業ではなく、みんなが喜ぶ森づくりが私にとって一番大事なことです。

—速水さんの「みんな」には、地域や日本だけでなく世界中の人間や生き物が含まれるんですね。しかも100年先の未来の「みんな」も考える。この山が美しいのは、愛と覚



FSC 認証材の切株椅子

※ 森林 FSC 認証：
適切な森林管理が行われていることを認証する「森林管理の認証 (FM 認証)」と、森林管理の認証を受けた森林からの木材・木材製品であることを認証する「加工・流通過程の管理の認証 (CoC 認証)」からなる国際的な認証制度。FSC (Forest Stewardship Council: 森林管理協議会) が運営。FSC 認証を受けた日本国内の森林は、2012年12月現在、35件 / 392.598ha、日本の森林面積の約1.5% (アマタ環境認証研究所調べ)

インタビュー
公益社団法人日本フイランソロビー協会
理事長 高橋 陽子
【2014年9月3日 三重県北牟婁郡
紀北町 速水林業大田賀山林にて】

悟の現れですね。現場での経験と科学に裏打ちされた数字の融合が、林業育成には不可欠なのだとかかりました。そして、若い人たちの育成も。地元密着かつスケールの大きな活躍を引き続き期待しています。